

国立民族学博物館の収蔵品 61

毛皮衣服の暖かさ



トナカイ毛皮の外套を着た筆者と牧畜犬（2011年、ヌムト）

毛のある動物の皮を、毛をつけたままなめしたものを毛皮という。なめした毛皮は、柔らかく、保温性に優れ、耐水性、通気性に富む。毛が退化したホモ・サピエンスが極北の寒冷な環境に進出して定着するには毛皮の衣服は不可欠であったと想像できる。筆者は、毛皮が寒冷地の衣服として最適であることを身をもって経験したことがある。二〇一一年に初めて西シベリアの北方少数民族のハンティ人と森林ネネツを対象に長期調査を行った。現地では、広大な森の中で丸太をくみ上げた簡素な小屋に暮らし、季節的に移動しながらトナカイ牧畜と漁撈、狩猟採集で生計を立てる世帯に住み込んだ。トナカイの毎日の放牧作業にも実際について行ってデータをとった。

この地域では、トナカイの群れを夕方に解放して、翌朝に足跡をたどって群れを探しに行き、家まで追いやる。トナカイは牧柵もなく、

ほとんど放し飼いの状態だが、群れが遠くに行き過ぎないようにしつつ、また橇の牽引に利用するため、冬季は毎日この作業を行う。一―二kmの地点で群れを見つけられるときもあるが、ときには一〇km以上探し回らねば群れを見つけれないときもある。

ある朝、その世帯の息子と一緒にトナカイを探しに行った。その日は群れが二つに分かれてしまっており、片方の群れをなかなか見つけることができなかった。気温はマイナス三〇度くらいだったが、ツンドラの凸凹した深い雪の中を歩いていると体が温まってきて汗をかいた。五時間くらい歩いて、やっとトナカイを見つけて少し休憩していたとき、自分の着ていた黒いダウンジャケットが霜が降ったように白くなっていることに気がついた。通気性が悪いため、筆者の体から出た湿気がこもり、中の羽毛が水分を含んで凍ってしまったのだ。ジャケットはべししゃんこになり、ずっしりと重く、歩くとバリバリと氷が砕ける音がした。薪ストーブのある暖かい家までまだ八kmあったが、自分の足で歩くしかなかった。一生懸命群れと息子についていったが、ついには疲労と冷えと脱水で歩くことができなくなった。しかし、一緒にいた息子は群れを追って先に進み、群れも彼も見えなくなった。携帯電話もネットも使用できないなか、道もない雪原の中で完全に一人になった。これまで何度も軽度の凍傷を経験したが、このときの内臓の冷え方と無力さは忘れられない。

それ以来、現地の人から毛皮の衣服を借りて身に着けるようになった。毛皮の暖かさは比べ物にならない。毛のあいだの空気の層により保温され、風を通さないが、どんなに歩いても湿気がこもらず暖かいままである。現在では、北方地域の人々もダウンや化学繊維でできた工場製の衣服を用いるようになったが、西シベリアの北方少数民族は、儀礼や祭りのときだけでなく、厳冬期には日常的にトナカイ毛皮で作った衣服を身に着けている。毛皮は彼らにとって美しく、身近な素材であり、何より機能的だからだ。ちなみに、一人雪原に取り残された私ができる後どうなったかという点、利口な牧畜犬が私を迎えに来て、ゆっくりと帰路を先導してくれたため、無事家にたどりつくことができた。

（大石 侑香）